

3942 松の花 花数にしも我が背子が思へらなくにもとな咲きつつ

【語釈】

\*松の花：初夏のころ、松の新芽が伸び、その先端に紫の小さな花が付く。なお、「松」には家持の帰りを「待つ」意味が掛けられている。

\*花数にしも：以下の「思へらなくに」に続く。すなわち、我が背子（あなた）には花の数にも入れてもらえないのに、の意。

\*もとな：いたずらに。なんにもならないのに、ただただ、けなげに咲き続けていることよ、の意。「咲きつつ」は、咲くことを繰り返す意。

【総釈】

松は次の歌のように、

4501 八千種の花は移ろふ常磐なる松のさ枝を我れは結ばな

（巻二〇、大伴家持）

移ろう花に対して、緑の常磐木であることを詠むのが普通であり、ましてや松の花を詠んだ例は万葉集中にない。古今和歌集にも無い。その点できわめてユニークな歌である。契沖は、あなたの目には花と見える女性たちが多いことでしょう。それに比べて私などは松の花のように花の数にも入れてもらえませんが、それでも私は片思いしてお待ちしております、と花に寄せて恋心を歌ったものだという（代匠記）。

花粉を飛ばす雄花



松かさになる赤紫の若芽  
目立たないがきれいである。



自分を卑下して、とるに足りない、物の数でもないと歌う例はほかにもあった。たとえば「倭文手纏き数にもあらぬ身」(603)とか「塵泥の数にもあらぬ我れ」(3727)などで、とりわけ「塵泥の」の例もまた万葉集中に他に類を見ない表現であった。これは巻十五の中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌に見える中臣宅守の次の歌である。

3727 塵泥の数にもあらぬ我れゆゑに思ひわぶらむ妹がかなしさ

平群氏の女郎の歌は中臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌をヒントにしているのではないだろうか。それというのも、さきに過激な表現といった次の歌、

3941 鶯の鳴くくら谷にうちはめて焼けば死ぬとも君をし待たむ

\*くら谷：斜面が崖のように切り立った谷をいうらしい。

\*うちはめて：契沖は「幽谷に身を投るなり」（代匠記）として、参考歌に古今集の次の歌を引く。

世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ

\*焼けば死ぬ：恋に焦がれて死ぬ。

この歌にしても、連想されるのは巻十五の狭野茅上娘子の、

3724 君が行く道の長手を繰り畳ね焼き滅ぼさむ天の火もがも

という歌だからである。

平群氏の女郎は、中臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌をヒントに、このようなユニークな表現を試みて越中の家持に贈り、どう評価されるかを知りたいと考えたのではないだろうか。

▽家持と郎女（女郎とも書く）たちの贈答

笠郎女 …… 卷三に3首、卷四に24首、卷八に2首（家持の返歌は2首）

紀女郎 …… 卷四・八に5首（家持の返歌は11首）

山口女王 …… 卷四に5首、卷八に1首（家持の返歌は記載無し）

中臣女郎 …… 卷四に5首（家持の返歌は記載無し）

平群女郎 …… 卷十七に12首（家持の返歌は記載無し）

契沖は「家持は風流の美男なりけるにや……今此郎女に至るまであまたの心を摧けり」（代匠記）、つまり家持は風流な美男子だったのだろうか、こんなに多くの女性たちの心を悩ましているが、と述べている。紀女郎を除けば、ほかの女性たちに対する返歌の記載が無く、冷淡にあしらったように見える。彼女たちは、みな片思いだったのだろうか。しかし、これらは実際の恋愛を示すものではない。

たとえば巻八からすでにとりあげた紀女郎との贈答歌を再度引用してみよう。

紀女郎が大伴家持に贈った歌

1460 戯奴がため我が手もすまに春の野に抜ける茅花そ食して肥えませ

大伴家持の返歌

1462 我が君に戯奴は恋ふらし賜りたる茅花を食めどいや瘦せに瘦す

このように、やはり社交上の（歌ともだち）なのである。